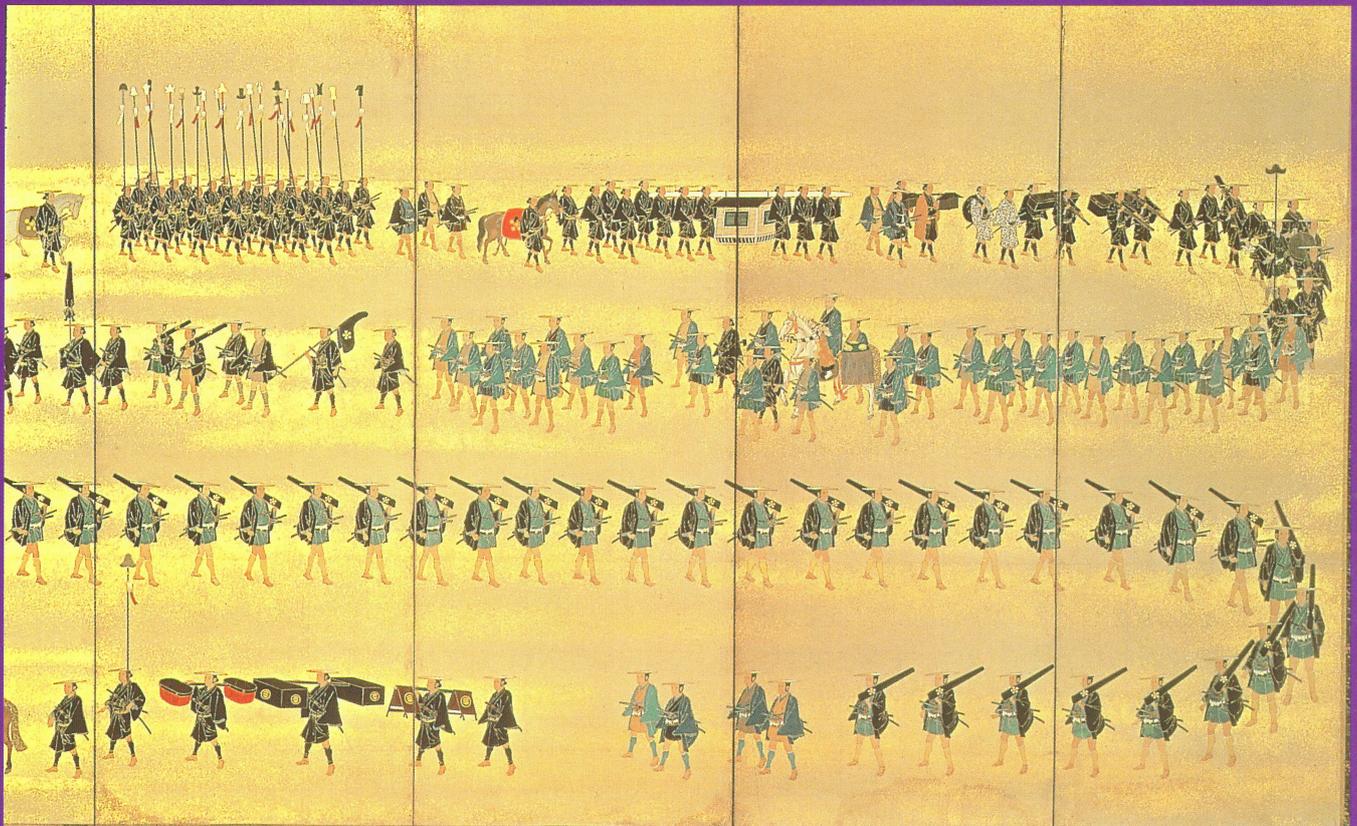


博物館 NEWS

ニュース



加賀藩大名行列図屏風

加賀藩前田家の参勤交代の行列を描いた八曲一双の屏風。石川県立歴史博物館所蔵。前田家は5代藩主綱紀つなのり以降、102万石を領地とした全国で最大の大名でした。参勤交代は、徳川幕府が大名統制のため、諸大名に対し江戸と国元との生活を1年交替とした制度で、これによって大名行列が一般化しました。前田家の参勤交代の規模は、大名随一の規模で、藩主直臣の家来である陪臣ばいしんを含めると行列の人数は、およそ2～4千人になったと言われています。

行列の人数は実際よりも少ないものの、藩主以下およそ450人が描かれています。行列は左隻の左下から始まり、右隻を経て、左隻の左上で終わります。先頭は帚ほうきと塵取りを持った掃除人と、前方の通行人を追い払う先払さきばらいとで始まり、最後部は家老しんがらうの殿備で終わります。

写真は右隻の右半分で、ちょうど行列の中ほどの部分にあたります。鉄砲組や多数の家臣に守られ白馬にまたがる藩主が描かれています。

(山川)

吉野川は北流していたか？

両角 芳郎

「かつて吉野川は、池田あたりから北へ、阿讃山地を横切って流れていたことがあった」という話を聞いた人も多いと思います。私も博物館の企画展「吉野川の自然」（97年）および「瀬戸内海のおいたち」（98年）の解説書の中で、「吉野川の北流」について少しふれたことがありました。

その後、この問題に関するこれまでの研究をおさらいしている過程で、かつての吉野川に対する「古吉野川」というよび方に紛らわしい点があることが気になりました。そこで、再度この問題について整理してみたいと思います。

三豊層群に含まれる結晶片岩礫

香川県大野原町から琴南町にかけての阿讃山地北麓の丘陵には、三豊層群とよばれる鮮新世後期～更新世前期の主に礫層からなる地層が分布しています。これらは、江畑断層の活動によって生じた東西性の地溝状凹地を埋めた、河川性（一部湖沼性）の堆積物です。

三豊層群の中に中央構造線以南の三波川帯に由来する結晶片岩の礫が含まれていることは、古くから指摘され、その原因をめぐるいろいろな議論が行われてきました。主なものは、鮮新世には阿讃山地はまだそれほど隆起しておらず、四国山地から阿讃山地を横断して北流する古水系が存在し、三豊層群に結晶片岩礫を供給したという考えです（岡田、1970ほか）。それに対し、結晶片岩礫は伊予三島方面から東へ流れる河川によって運ばれたものだ、という反論もありました（阿子島・須鎗、1989）。

最近、植木・満塩（1998）は三豊層群の層序や礫の組成、古流向などを詳しく調べ、阿讃山地の隆起過程を論じました。その中で、三豊層群下部の財田層は、阿讃山地北麓を西流する「古財田川」の本流性礫層で、そこに含まれる結晶片岩礫は、阿讃山地を横断して北流する2つの河川（「古吉野川」および「古土器川」）によって供給された、と結論づけました。財田層およびその同時異相とされる山本層に含まれる火山灰層は、250万年および210万年という

鮮新世末を示すフィッシュトラック年代が得られています。いっぽう、財田層を不整合におおう扇状地性の焼尾層には結晶片岩礫が含まれず、その年代はおおよそ120万年前以降と推定されます。こうしたことから、阿讃山地の隆起によって山地を横断して北流する水系が消滅し、東流する現在の吉野川が生まれたのは、210～120万年前の間であると推論しました。

北流河川の通り道

それでは、鮮新世末に阿讃山地を横断する北流河川が存在したとすれば、それはどこを通過していたのでしょうか。その河川は、更新世初期までは深い横谷を刻んでいたはずで、そのなごりが風隙（上流部が争奪されたため水流がなくなった旧河道跡）として、現在の地形にも残されているのではないかと考えられます。相栗峠、猪ノ鼻峠あるいは薬師峠がその候補にあげられてきました。そして、植木・満塩（1998）は、古吉野川の通り道は池田北方の猪ノ鼻峠、古土器川の通り道は三野町芝生北方の真鈴峠であると考えました。

現在の吉野川では、猪ノ鼻峠へ通じる谷の出口は池田の曲がり角から東へ4～5kmずれています。これは、池田を通過して東西にのびる中央構造線の右横ずれ運動によって、北流河川が消滅して以降にこれだけのずれが生じていると考えることができます。

吉野川平野の古水系

それでは、阿讃山地を横断する北流河川が存在した鮮新世末～更新世初期には、当時の“吉野川平野”の水系はどうなっていたのでしょうか。それを知る手がかりは、現在の吉野川南岸の川島町から鴨島町にかけて分布する森山層、三野町以東の阿讃山地南麓に分布する土柱層、徳島平野地下の北島層などの地層です。

森山層は、下部には含まれる藤井寺火山灰層が230万年という年代を示します。また、礫層には結晶片岩礫のほか、和泉層群に由来する砂岩礫も含まれています。こうしたことから、

すでに鮮新世末には、四国東部の中央構造線沿いに堆積盆（地溝性凹地）が生まれ、三波川帯から北流する河川だけでなく、阿讃山地から南流する河川も集めて東へ流れる水系が存在したことも確かです。阿子島・須鎗（1989）はそれを“古吉野川”とよびました。

土柱層は、阿讃山地から供給される扇状地性^{せんじょうち}の土石流堆積物を主体として、吉野川の本流性堆積物をはさむ地層です。火山灰層の年代は、130～32万年にわたります。もう少し古い地層が見つかる可能性は残っていますが、いずれにしても、土柱層は阿讃山地が隆起し北流河川が消滅した時期以降の地層でしょう。

北島層は森山層や土柱層の相当層だと考えられますが、年代等に関する詳しい情報はほとんど得られていません。そのため、四国東部の中央構造線沿いの堆積盆がいつ生まれたかは、はっきりしませんが、大阪湾や紀ノ川沿いに堆積盆が生まれた約300万年前ころか、それから少し遅れた時期だと考えられます。

どちらが古吉野川か？

ここまで、原典に従って、池田あたりから北

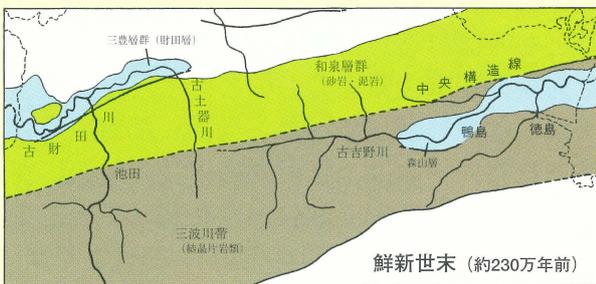


図1 吉野川平野周辺の水系の変遷（植木・満塩，1998 ほかに基づき作図）。

へ阿讃山地を横断していた河川を「古吉野川」とよび、同じ時期に存在した吉野川平野を東流する別の河川も“古吉野川”とよんできました。しかし、2つの別々の川に対して古吉野川と名づけるのはまずいと、最近になって気づきました。現在の吉野川の原形は何かといえ、それは「鮮新世以降の中央構造線の活動に伴って生まれた川」であるべきなので、森山層などを堆積しながら東流していた河川こそ古吉野川とよぶのにふさわしいと思います。

そうだとすれば、阿讃山地を横断して北流していた河川は何とよんだらよいのでしょうか。この河川は、もともと鮮新世には瀬戸内方面の堆積盆に注いでいた川で、その後、財田層を堆積した古財田川によって流路を争奪され、その支流（あるいは本流）になったものです（植木・満塩，1998）。したがって、この北流河川に対しては新しい名前をつけるか、“古財田川上流部”とよんでおくのが妥当ではないかと考えます。

古吉野川から吉野川へ

日本の山地では河川争奪という現象がよく見られます。隣り合う一方の河川の浸食が激しく、河床高度が低い場合、他方の流域に食い込み、その水流を奪う現象です。

土柱層が堆積しはじめたころ（約160～150万年前？）から、四国山地や阿讃山地の隆起が激しくなり、それとともに東流する古吉野川の谷頭侵食^{こくとうしんしょく}が活発になったと考えられます。やがて古吉野川の上流は北流する古土器川に達して、その上流を争奪します。そして、「ついには古財田川上流部まで達して、その流路をとりこむことによって現在の吉野川が生まれた」ということになるのではないかと思います。

引用文献

- 岡田篤正，1970. 吉野川流域の中央構造線断層変位地形と断層運動速度。地理学評論，43(1): 1-21.
 - 阿子島功・須鎗和巳，1989. 中央構造線吉野川地溝の形成過程。地球科学，43: 428-442.
 - 植木岳雪・満塩大洗，1998. 阿讃山地の隆起過程：鮮新～更新統三豊層群を指標にして。地質学雑誌，104: 247-267.
- （他にも多くの文献を参考にしていますが、ここでは省略させていただきます。）

（副館長：地学担当）

カジカー 20 数年ぶりに生息を確認

カジカ（図1）という魚は一見ハゼのような姿をしていますが、別の仲間です。同類にはアユカケ（図2）というよく似た魚がおり、徳島県内にも生息しています。カジカは、かつて四国4県すべてに生息していたのですが、現在まとまった生息地としては、わずかに愛媛県の加茂川が残っているだけとなってしまいました。なぜ、このように減ってきたのか原因はわかっていませんが、確かなのはここ数十年の間に起こった出来事だということです。いずれにせよ、人の活動が原因となっていると考えられます。

このカジカが、私たちの調査によって昨年夏に那賀川の下流（図3）から1個体だけ採集されました。県内におけるこれ以前のもっとも新しい記録は『徳島県魚介図鑑＜淡水魚編＞』（徳島新聞社）掲載の1975年頃に吉野川支流の鮎喰川で採集された個体の写真ですから、県内における記録としては、なんと20数年ぶりのことです。

実は以前から何とか生息を確認したいと思い、鮎喰川や吉野川の第十堰のあたりだけでなく、県南の海部川までずいぶんと捜したのですが、空振り続きだったのです。地元の方に聞くと「昔はいたけど、近頃見かけんなあ...」という答えばかりで、ほとんど諦めかけていたところ、やっと今回確認できました。

さて、この魚はたいへん興味深い魚で、一生を川ですごす型と、産卵は川ですが、子供はいったん海まで降る型とがいることが以前から知られていました。前者が陸封型で、卵は大きく、子供は発生の進んだ状態で孵化するのに対し、後者が回遊型で、こちらは卵は

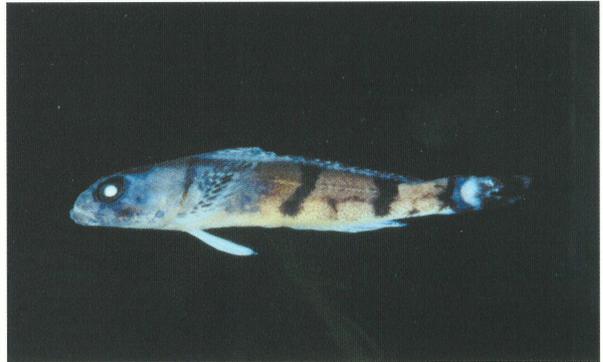


図1 カジカ（体長30.5 mm）。那賀川産の液浸標本。

小さく、子供は発生のあまり進まない状態で孵化します。そしてこれらの型の違いは、実際は種の違いかもしれないと思われていました。ところが最近の遺伝学的研究によれば、それぞれの型はさらにいくつもの集団に分かれることがわかってきました。事はそれほど単純ではなかったわけです。

那賀川で採れたカジカは、水産庁養殖研究所の岡崎登志夫さんにDNAを分析してもらったところ、回遊型で、太平洋側の集団（小卵型とも呼ばれる）に属し、紀伊水道をはさんだ対岸の和歌山県産のものと同じであることがわかりました。当初、那賀川で採集されたカジカは、琵琶湖産アユの放流に伴い移入されたものではないかと疑っていたのですが、どうもその可能性はなさそうです。なお、愛媛県加茂川産のカジカも同じ回遊型ですが、こちらは日本海側・瀬戸内海地域に分布する別の集団（中卵型とも呼ばれる）に属しています。同じ四国内でも、那賀川産と加茂川産とは大きく異なっているのです。

（動物担当 佐藤陽一）



図2 アユカケ（体長53.0 mm）。那賀川産の液浸標本。

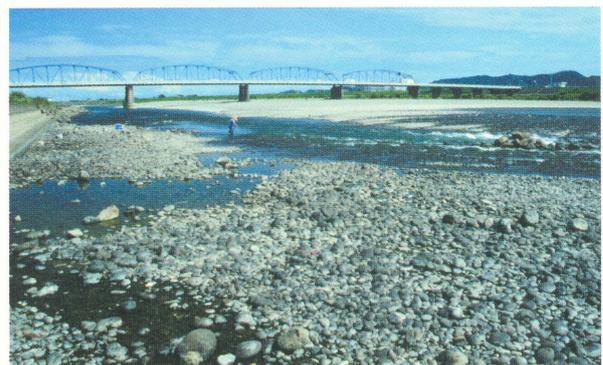


図3 那賀川のカジカ・アユカケの生息地。羽ノ浦町岩脇。

よみがえる江戸時代絵巻 大名行列

江戸時代の大名は、徳川幕府への務めと領国支配のもとで、それぞれ目的に応じた供揃ともどろえによる行列を行いました。この時、藩主や世継ぎなどを中心として構成された行列が、大名行列と呼ばれています。

大名は、徳川幕府への務めとして、参勤交代、日光参詣、異国船警護などにあって、定められた供揃で務めを果たしました。また、領国支配のもとでは、領地への初入国ごしりく、輿入、参詣などにあって、格式に応じた供揃による行列が行われました。

この企画展では、各種の大名行列の構成をとらえることを目的とします。また、大名行列に用いられた乗物をはじめ、武器、武具、調度品などの行列道具の優品約70点をご紹介します。

◆ おもな展示品

- 美作国津山藩主乗物（津山市立津山郷土博物館）
- 花文唐草金蒔絵乗物（株・日本刀剣）
- 加賀藩大名行列図屏風（石川県立歴史博物館）
- 江戸城年始登城風景図屏風（東京都江戸東京博物館）
- 徳島藩大森羽田出陣絵巻（当館）
- みとものつら絵巻 花・月・雪（当館）
- 徳川種姫婚礼行列図（和歌山市立博物館）
- 左万字紋白糸威二枚胴具足 唐冠形兜付（当館）

- 高良山御行列（宮内庁書陵部）
- 御葬礼行列（国文学研究資料館史料館）
- 黒熊毛槍・白熊毛槍（津山市立津山郷土博物館）
- 梅鉢紋長持（藩老本多蔵品館）
- 朱塗武具運枠（成巽閣）

- ◆会 期 99年4月20日(火)～5月23日(日)
- ※休館日 4/26(月), 5/6(水), 5/10(月), 5/17(月)
- ◆会 場 企画展示室・多目的活動室
- ◆観覧料 一般 200円／高校・大学生 100円／小・中学生 50円（20名以上の団体は2割引き）

関連行事

(1) 講演会

- 日 時 5月9日(日) 13:30～15:00
- 会 場 イベントホール（入場無料）
- テーマ 参勤交代と武士の意地
- 講 師 山本 博文氏（東大史料編纂所助教授）

(2) 展示解説

- 日 時 5月2日(日) 14:00～15:00
- 会 場 企画展会場（観覧料必要）
- 講 師 当館学芸員



図1 花文唐草金蒔絵乗物。



図2 みとものつら絵巻 月。



図3 徳川種姫婚礼行列図。

四季和歌図巻 狩野常信筆 1巻

『新古今和歌集』に収める季節の歌8首を書き、それぞれに淡彩の絵をそえた図巻です(表1)。附属する『筆者目録』から、8人の公家が1首ずつ書いたことがわかります(表2)。巻末には「常信筆」の落款と「藤原」の白文方印(図3)があり、木挽町狩野家の2代目で、幕府奥絵師であった狩野常信(1636～1713)が絵を描いたと知られます。

公家の官職と序列を『公卿補任』などで調べますと、目録とあうのは貞享元年12月から同3年10月(1684～1686)のあいだに限られます。作られた経緯はわかりませんが、最初の1首を書いた近衛基熙は、和歌をとくに好み、諸学に通じていましたので、彼をめぐって文芸上の環境ができていたと思われる。常信の絵は江戸狩野様式にもとづき、新味のある図様ではありませんが、淡雅な味わいにあふれています。

なお、伊勢国津藩の藤堂家による書付が附属しており、かつて同家に伝わっていました。しかし、昭和8年(1933)には旧徳島藩主の蜂須賀家から売立にだされています。嘉永5年(1852)に両家は姻戚関係を結んでいるので、そのついで譲られたのでしょうか。

落款：常信筆

印章：「藤原」白文方印

品質：紙本墨画淡彩

法量：縦31.1cm、横554.4cm

付属品：筆者目録1通、由来書付1通

(美術工芸担当 大橋俊雄)

表1 収録和歌

- ほのほのと春こそ空にきにけらしあまのかく山かすみ
たなひく (巻第一 春歌上 後鳥羽院)
- むめの花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影そあら
そふ (巻第一 春歌上 藤原定家)
- むかしおもふくさのいほりのよるの雨になみたなそへ
そやまほとときす (巻第三 夏歌 藤原俊成)
- いつしかと萩の葉むけのかたよりにそそや秋とそ風も
きこゆる (巻第四 秋歌上 崇徳院)
- 心なき身にもあはれはしられけりしき立沢の秋の夕暮
(巻第四 秋歌上 西行法師)
- たつた河(ママ)あらしや峯によはるらむわたらぬ水
もに起きたへけり (巻第五 秋歌下 宮内卿)
- 霜かれはそこともみへぬくさのはらたれにとはまし秋
のなこりを (巻第六 冬歌 藤原俊成女)
- 初雪のふるのかみすきうつもれてしめゆふのへも冬こ
もりけり (巻第六 冬歌 藤原長方)

表2 筆者目録

- 一ほのほのと 近衛左大臣基熙公
- 一むめの花 鷹司右大臣兼熙公
- 一むかし思ふ 大炊御門前内相経光公
- 一いつしかと 清閑寺大納言熙房卿
- 一心なき 今出川大納言伊季卿
- 一たつた川 中院前大納言通茂卿
- 一霜かれは 久我大納言通規卿
- 一初ゆきの 烏丸大納言光雄卿



図1 ほのほのと春こそ空にきにけらし



図2 むめの花にほひをうつす袖の上に



図3 落款・印章

Q.数年前に中国で買ったこの化石、本物でしょうか？

A 問題の“化石”は、ベルベットを敷き詰めた化粧箱の中に入っていて、見かけはたいへんりっぱです。また、“化石”そのものも、全身の骨がほぼ完全に残っているだけでなく、関節も全部つながっていて、なかなかよい標本のように見えます（図1）。しかしよく見ると、次のような不自然な点がいくつか観察できます（図2）。

- 1) 関節がつながった骨の化石は、泥などの細粒の堆積物に含まれていることが多い。ところがこの標本の骨のまわりは、粒の大きさが不揃いな砂岩とかモルタルのように見える。
- 2) “化石”の出ている面の裏側は黒っぽい泥岩のように見え、表側と見かけがかなり違う。
- 3) ふつう、化石の標本を作製するときには、骨の周囲の泥や砂はできるだけ取り除く。レリーフ状に仕上げるときも、骨が浮かび上がるように彫り込まれることが多い。しかし、この“化石”では、骨の周囲の砂は骨とともに盛り上がってる。
- 4) 骨をいくらよく見ても、骨組織特有の細かい構造は見あたらない。また、全体的に透明感があり一様に見える。骨の表面はツルツルしていて、一方向の細かいキズが無数に入っている。

よく検討した結果、この“化石”は完全に人間の手で作られたものだと判明しました。実物の部分は全くない上、おそらく最初から人をだますためにつくられたものなので、模型とかレプリカというよりはニセ物と呼ぶ方がふさわしいものです。モデルにしたのは、おそらく中生代三畳紀の *Keichousaurus*（貴州竜）という爬虫類の化石でしょう。本物の貴州竜の骨格は、きめの細かい泥岩の中に入っています。

私が考えた作り方の手順はこうです（図3）。まず、平らな岩石を用意し、片面に爬虫類の骨の形を合成樹脂で厚く盛り上がるように描



図1 化粧箱に入った“化石”。化石の前後長17.6cm。



図2 頭部～胸部にかけての拡大写真。

きます（図3-1）。型を使えば簡単にできるでしょう。樹脂が固まったところで、モルタルを一面に塗ります（図3-2）。モルタルが固くなったら、樹脂が一面に現れるまで紙やすりなどで磨き続けます（図3-3）。磨き終わって乾いたところで、刺繍で飾った化粧箱に収めます。こうすることで、このようなものが一つ完成しそうな気がしませんか？

この“化石”は博物館に寄贈していただきました。ふつう、こうしたものは博物館で積極的に集める対象にはなりません。いろいろな意味でおもしろいものであることも確かです。

ニセ化石はけっこう出回っているようで、いろいろなところで見かけます。タイプもさまざまです。化石を買って集める方はご注意ください。（地学担当 中尾賢一）

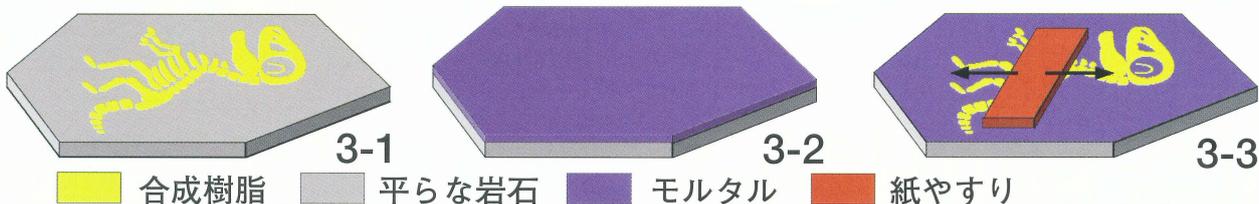


図3 筆者が推定したニセ貴州竜化石の作製方法。

4月から6月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ	行 事 名	実 施 日	実施時間	対 象 (人 数)
野 外 自 然 か ん さ つ	徳島市中心部の地質見学	4月 18日(日)	13:00～16:30	小学生から一般 (30名)
	春の野山を歩こう	4月 25日(日)	10:30～14:30	小学生から一般 (30名)
	磯のいきもの①	5月 16日(日)	11:30～13:30	小学生から一般 (70名)
	磯のいきもの②	5月 30日(日)	11:00～13:00	小学生から一般 (70名)
	川原の石ころしらべ	6月 6日(日)	13:00～16:30	小学生から一般 (40名)
土 曜 講 座	※ダムと魚	4月 10日(土)	14:00～15:00	小学生から一般 (50名)
	※X線で何がわかるか	5月 8日(土)	14:00～15:00	小学生から一般 (50名)
	※中世の民衆文化	6月 12日(土)	14:00～15:00	小学生から一般 (50名)
歴 史 散 歩	古墳見学①	5月 23日(日)	9:00～17:00	小学生から一般 (45名) 貸切バス利用
室 内 実 習	貝化石標本のつくりかた	6月 13日(日)	13:00～16:00	小学生から一般 (30名)
企画展関連行事	※展示解説	5月 2日(日)	14:00～15:00	企画展「よみがえる江戸時代絵巻―大名行列―」 観覧料必要 (50名)
	※記念講演会「参勤交代と武士の意地」	5月 9日(日)	13:30～15:00	小学生から一般 (300名)

●※は申し込み不要です。その後は往復はがきでお申し込みください。(各行事の1カ月前から10日前までに届くように)

●くわしいことは博物館にお問い合わせください。

博物館友の会に入会しませんか？

徳島県立博物館では1999年度の会員を募集しています。

博物館友の会は博物館活動を通じて、広く自然と歴史・文化に親しむとともに、会員同志が交流をはかることを目的としています。

また、研究や勉強だけでなく、博物館がこれまで以上に楽しいものになるような行事を実施しています。

博物館の展示や行事をとおしての発見や会員同志の出会いからも、新たなものの見方が開けることでしょう。さあ、あなたもいっしょに新しい世界のとびらを開いてみましょう。

会員になると、次のような特典があります。

- (1)博物館の常設展を無料で観覧できます。
- (2)会報「アワーミュージアム」や博物館の催し物案内、博物館ニュースなどが定期的に送付されます。
- (3)企画展図録等の出版物を割引購入できます。
- (4)ミュージアムショップで商品を割引購入できます。
- (5)いろいろなことが体験できる友の会行事(貸切バス利用行事を含む)に参加できます。

会費(年額)は次のとおりです。

個人会員 2,000円

家族会員 3,000円



入会をお待ちしています。



秋の研修会 姫路城天守の階段

博物館ニュース No. 34

発行年月日 1999年3月25日

編集・発行 徳島県立博物館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山 ☎088-668-3636